

Title	渦中の声、物語のフレーム --ほとりから解く世界の謎
Author(s)	山本, 博之
Citation	ほとりの朔子 (2014): 18-19
Issue Date	2014
URL	http://hdl.handle.net/2433/229018
Right	発行元の許可を得て登録しています.
Type	Article
Textversion	publisher

渦中の声、物語のフレーム——ほとりから解く世界の謎

山本博之（京都大学地域研究統合情報センター准教授）

日本人のになぜ外国のことを調べたり助けたりするのか。朔子が海希江に向けたこの質問を半捻りすれば、外国人はなぜ日本の映画を観て愉しんだり感動したりできるのかという問いにもなる。国境を越えた交流がますます増えている今日、この地域研究的な問いはどの分野でも避けられなくなっている。

地域研究で大切なのは観察と翻訳と世界観の三つだ。地域研究では、外国に長期間住み込んで、地元の言葉や文化風習を身につけて、その国の人々の考え方を探る。ただし、その究極の目的は、特定の外国の事情通になることではなく、この世界全体の謎解きにある。断片的な情報しか手に入らなくても、それを一つ一つ集めていって、つなぎ合わせて世界像を探り当てる作業は、冒険しながらヒントを集めて謎を解くゲームにも通じるところがある。

『ほとりの朔子』も、絵に描いたような事件の顛末を語るのではなく、少しずつヒントを与えて観客に世界像を探らせようとしている。たとえば、いつの、どこの話なのか。物語が始まるのは八月二六日「日曜日」で、震災と原発事故の後ならば二〇一二

年だろうか。場所を示唆するものはほとんどなく、兎吉が運転する車が湘南ナンバーであることぐらいで、朔子たちがたどり着いた駅でも駅名はわからない。一箇所だけ地名のヒントが示されているのが「幸運の鐘 亀の宿る洞穴」という看板で、そこから想像を逞しくしてこの物語を「亀に乗せられていざなわれた世界」と見ることもできそうだが、その話は別の機会に。

地域研究も映画も、観察と翻訳が大切なのは同じだ。目の前にあるものがどう見えるかと、実際にどうであるかは、同じとは限らない。かき氷のシロップはどれも同じ味なのに、色が違おうと味も違おうと錯覚してしまう。あるものを見る時には、それを直接見るだけでなく、間接的に見ることも必要だ。インドネシアを理解するにはオランダから見ること大切だ。

同じものを見ている、見る人の生い立ちや境遇によって受け止め方が違うこともある。『ほとりの朔子』は海外でも高く評価されているが、海外の観客はこの作品をどのように見たのだろうか。それは私たちが観る『ほとりの朔子』と同じなのだろうか。

原題の『ほとりの朔子』には、湖のほとりという意味と、受験

浪人中の朔子が大人と子どもの「ほとり」の状態にあることが重
ねられているが、海外での上映時には「Au revoir, yet」(夏にさ
よなら)というタイトルがつけられている。字幕が工夫されてい
るのはタイトルだけではない。朔子たちの軽妙な台詞には日本
語独特の言い回しも多いが、字幕はまったく異なる表現を使い
ながらオリジナルの雰囲気損なわれていない。兎吉たちが自
転車に乗って「ピクニック」を歌う場面でも、「She'll be coming
round the mountain」の歌詞を使つて、「兎吉たちのやや調
子はすれな陽気さが際立たせられている。映画館で同じ映画を
観ていても、実は隣の席の人とまったく違う物語を観ているの
かもしれない。

『ほとりの朔子』では、実際にインドネシアをはじめ世界各地
を訪れている鶴田真由がインドネシアの地域研究者役を演じて
おり、本物以上の雰囲気醸し出している。それが朔子の無邪
気な言葉や態度によって意図せずして挑まれている様子を描く
ことで、世の中を観察し、翻訳し、世界観を紡ぐ地域研究とい
う営みに果てないことがうまく描かれている。

朔子は、日本にも困っている人がいるのになぜ外国のことを
調べたり助けたりするのかという本質的な問いを海希江に突き
つける。もつとも、朔子は海希江の生き方を否定的に捉えてい
るわけではないようだ。十日間の夏休みを終えた朔子は、将来

の進路を確かなものにするために家に帰る。将来何をしたいか
を尋ねられても「秘密」としか言わないが、その方向性はなんと
なく想像がつく気がする。

『ほとりの朔子』で描かれているように、出来事の渦中にいる
人の声は方向が定まらずに多方面を向きがちで、外部の人はそ
れをフレーム(枠)に入れて一定の方向を持つ物語として語ろう
とする。フレームがなければ当事者以外にはわかりにくい。し
かし、フレームに入れられると、方向が誘導されたり、そこか
ら切り落とされる部分が出たりする。フレームは大切だが、本
当の姿を知るにはフレームを越えて現場に飛びこみ、直接会っ
てみることも大切だ。福島を経験を語る孝史をフレーム越しに
見た朔子が実際に会いに行ったように。

海希江が翻訳中のインドネシアの本に出てきた節黒仙翁(フシ
グロセンノウ)の花を探しに行ったとき、「転職」「転職」を花言葉
とするその花を先に見つけたのは朔子だった。花の写真撮ろう
とする海希江に、朔子は「食べないの?」と尋ねる。翻訳中の本
では、死んだ弟が每晚幽霊になつて帰つてきてその花を食べると
いう。弟の幽霊の気持ちを知るために、その花を食べてみた。
直接知りたいたいものだけでなく、それに関わることを端から端まで
調べたい、体験したいという気持ちに駆られるのが地域研究者だ
とすれば、朔子にははじめからその素質が十分にあったようだ。